
白恋歌

藤乃蓮子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白恋歌

【Nコード】

N5718B

【作者名】

藤乃蓮子

【あらすじ】

世界に唯一の大陸、エンドアは、天竜が創り四竜が護る豊かな大地。むかしむかし、ある国で、一人の娘と竜が恋に落ちました。二人は、幸せな時をすごしていました。けれどある時をきっかけに、竜は、愛しい娘に呪いをかけて、消えてしまったのでした。

0・求める者（前書き）

かなりゆっくりな更新になりますが、筋は決まっていますので、できるだけ頑張って執筆いたします。

0・求める者

精霊の森が、ざわめく。

身体が重い。もう、一步も進めない。

少年は、膝から地面に崩れ落ちた。無意識に前に出た両腕が、震えながらも何とか上半身を支えた。大粒の冷たい汗が勢いよく滴り落ちて、少年の小さな両手を濡らした。

(行かなくちゃ……きつと、もうすぐなのに……)

目指す場所は、深い森の奥にあるという湖。この地方一帯には、そこに竜が棲んでいるという伝説があった。

天に住まう【天竜】が大地を創ったのが世界の始まりとされているが、その天竜が大地とそこに生まれた命を護る為に生み出したのが、四竜と呼ばれる四頭の竜だ。その中でも、天竜の涙から生まれたいという【水竜ファルシオン】が、語り継がれる湖の主である。

森は、遙か昔から人を拒んできた。足を踏み入れたものが、生きて外の世界に帰ることはなかった。森の精霊たちが竜を害そうとする者の命をとるのだと、人は恐れた。いつしか森は【精霊の森】と呼ばれ、誰も近付かなくなった。

(まだ死ねない)

森に入って一時間はさまよっただろうか。五分と経たないうちに息苦しさを感じ、十分経つころには全身が汗まみれになっていた。一步進むごとに、森に精気を奪われていくような気がして恐ろしく

なった。頭の内側から鐘を打ち鳴らされているような、吐気を伴った酷い頭痛がした。何歩か進んでは立ち止まり、その度に挫けそうになった。

少年は、這ってでも進もうと腕を持ち上げようとして、ついに横向きに倒れた。もう、指一本動かせない。視界は霞み、耳鳴りの音しか聞こえない。

大切な人に、笑って欲しかった。その笑顔を自分に向けて、抱きしめてくれたら。そうしたら、その一瞬あとに死んだってかまわなかったのに。

少年は、瞼を閉じて涙をこぼすと、糸が切れるようにぶつりと意識を失った。

1・語り部と少女

大陸北東部に位置する、キオウ山地。なだらかな山の中腹にあるタクス村は、年に一度の祭りを翌日に控え、慌しい空気に包まれていた。晚い春を迎えたばかりの大地には所々雪が残っていたが、山々を吹き抜ける風の冷たさは、日に日に和らいでいるようだった。

村では、麓へと続く道を見下ろす村長の館に女たちが集まっていた。お喋りをしながらの祭りの準備も、そろそろ仕上げに取り掛かるうというところだ。

「あれ、キリエ様」

眺めの良い窓際に陣取って衣装を繕っていた若い女が、ふと外を見て口を開いた。麓の方から山道を登ってくる、一人の少女の姿が視界に入ったのだ。少女の髪は珍しい青銀色をしていて、どこにいてもとても目立った。

「キリエ様がどうしたのさ」

他の女たちも、作業の手を止めて顔を上げた。

「朝のおつとめから帰ってから見かけないなあって思ってたんだけど、外に出てたのね」

「ほんとだ。花をあんなに……どこまで行って見つけてきたんだろ」少女は、薄紫の花の束を抱えていた。村の近くでは、まだ花は咲かない。麓の近くまで下りて行って、摘んできたのだろう。思いがけない春の便りに、そこにいた全員が窓に集まってくる。そうして皆で見ていると、少女は村の入り口を通り過ぎて、さらに山の方へと登っていった。

「ああ、神殿に持っていくのに、摘んできたのねえ」

「そういえば、おつとめの間に花が咲くといいなって言ってたっけ」

「ふうん。キリエ様らしいね」

女たちは、少女の笑顔を思い浮かべて心を和ませた。

村と山頂の間には、石造りの古い神殿があった。百年以上前から半壊した状態だったが、村人の心の拠り所となっている場所だった。神殿に祀られるのは、【竜】 大地に生きる人にとって【神】と同等の、神聖で尊い存在 である。村人にとって、村と民の心が神殿と共にあるということが、日々の癒しになり支えにもなっていた。

神殿内には、竜と世界の関わりや村の成り立ちが刻まれた石碑があった。その一文に、神殿に仕えていた【巫女】がタクスの長の祖先であることと、彼女が【竜の血を引く者】だったということが記されていた。竜と巫女の魂を慰める為の儀式として伝承されてきたのが、年に一度行われる祭りだった。

巫女の血を引く村長の家に生まれた女の子は、十二になると母親から【竜の巫女】の役目を引き継ぐ。【竜の巫女】となった少女は、祭りの一週間前から前日まで、毎朝神殿に参って祈りを捧げ、身を清める。【朝のおつとめ】と呼ばれる儀式だ。そして当日、神殿の前で舞を舞う。

巫女の務めは祭りの間だけのものだ。幼い頃から舞の稽古をしなければならぬこと以外、巫女の役目について制約を受けることは無いに等しい。伴侶を得ることや子供を産むことは認められていたし、望めば村の外で暮らすことも許された。

竜は人の繁栄を見守る存在であり、真に巫女の為すべきことは、子孫を残し人として幸福に生きることだと考えられていた。

世界に唯一の大陸エンドアは、神の僕である天竜の創りし聖なる大地。天竜が生み出し四竜は、四方に分かれて大地を育み、そこに生まれた命を護り続けた

青くきらめく銀色の髪の少女　キリエは、石碑に刻まれた文字を指先で辿ると、深いため息をついた。膝を抱えた腕に、力を込める。顔を上げて、所々崩れ落ちた天井の隙間から差し込む光の柱をぼんやりと眺め……再びため息をこぼす。そのまま俯くと、石碑の前についさつき供えた花の束が目に入った。

とうとう明日、この場所で舞を舞うのだと思ったら、落ち着いて村にいたることなどできなかつた。朝の務めの後、そのまま村に帰らず山を下りて花を探した。一抱えの束になるほど摘むのには半日かかったが、落ち着くどころかため息の数は増える一方だ。祭りを楽しみにしている村人の前で笑っていられるようにならなければ、村には帰れない。

最初から、母のように舞えるとは思っていない。

（そんなの当たり前じゃない……、……違う、そうじゃない。そうじゃない）

キリエは膝に顔を埋めて、きつく目を閉じた。母のようにはなれない。なれるはずがない。

自分は、【竜の血を引く巫女】ではないのだから。

その時、神殿の外から風が吹いてきた。固く縮こまった少女の身体を、背中から包み込むような暖かい風だった。ふと、人の気配を感じてキリエは目を開けた。

「そこにいるのは、キリエですか？」

呼びかけられて振り返ると　いつ現れたのか　神殿のすぐ外に、長い黒髪に褐色の肌の青年が立っていた。キリエは目を丸くして息を呑んだ。

その青年は、オーヴェラという弦楽器を背負って世界を旅している、年齢不詳の人物であった。彼のことと確実に分かっているのは、仙人のように長く生きていることと、祭りの時期に必ず村を訪れるということだけだった。村との付き合いは長く、村人たちからも慕

われ敬われる存在だ。そんな彼はキリエにとっても特別な存在であり、村に帰ることができない今、一番会いたいと思っていた人物だった。

「ルーー!!」

キリエは、弾けるように立ち上がって駆けて行き、青年に跳び付いた。

「おかえりなさい!」

「はい、ただいま」

青年は、キリエを抱きとめると少し照れたように微笑んだ。

「今年は少し来るのが遅くなってしまつて、すみませんでしたね。オーヴェラの絃を買いにファトリビアに寄っていたら、予想以上に山越えが厳しくて……はあ、私も年ですかね。お詫びに、貴女が欲しがっていたエンブレージュの髪かざ……あ、いや、何でもありません。おや、少し背が伸びましたか?」

「……………」

「……キリエ?」

キリエは青年にしがみついたまま、声押し殺して泣いていた。ついさつきまでずっと一人で堪えていたものが、簡単に溢れ出して止まらなくなっていた。

青年は、紫水晶のような瞳を伏せて、何も言わずに少女の背を撫で続けた。

辺りに転がる瓦礫の一つに腰掛けた青年と少女は、しばらくの間言葉も無く過ごした。青年はオーヴェラを肩から降ろして、キリエが聴いたことの無い異国の音楽を奏でていた。キリエは、ただこうして青年の傍にただで、心の中が凪いでいくような気がした。

子守歌のような優しい旋律を聴いているうちに、ふと懐かしい記

憶が蘇り、キリエは身を乗り出した。

「そうだ、ルー。いつか約束したこと、覚えてる？」

青年は、きよとんとして手を止めた。

「ほら、一度だけ歌ってくれた……竜と人の恋の歌」

「……白恋歌びやくれんか、ですか」

一瞬、青年の瞳が陰る。

「そう！ あの歌には、【語り】があるって言うていたでしょう。

聞かせてって言うたら、ルーは『あなたがもう少し大人になったら』
って……」

「ええ、覚えています。そうでしたね」

古い歌の中には、その背景が物語として語り継がれているものがある。青年は、淡く微笑んで頷いた。それから神殿をじっと見つめ、少しして呟くように言葉を続けた。

「……そうですね。もう、いいのでしょうかね。貴女の心は、大人になりましたから」

（ルー？）

そして青年は、オーヴェラを構えた。

2・白い少女

それはそれは 深い森をぬけ
それはそれは 高々とそびえる山のふもとの
それはそれは 清らかな湖のほとりに

娘がひとり 住んでいた

百の恋と 引きかえようと
百の命と 引きかえようと
決して解けない 呪いをうけた

娘がひとり 住んでいた

むかし むかしのものがたり
むかし むかしのものがたり

この世界に唯一の大陸【エンドア】は、神が生み出した【神竜】に護られた、聖なる大地。

始まりは、天上の神竜である【天竜ジェリアクシス】が、その吐

き出す炎で海底火山を揺さぶり起こして広大な大地を創った。その時、彼の炎の息の中から【火竜アルノード】が、燃え盛る大地からは【地竜ヴィルディーク】が、羽ばたかせた翼から巻き起こった風の中から【風竜セラシエーン】が生まれた。そして最後に、宝石のような涙を零して【水竜ファルシオン】を生み出すと、地上へ降ろした。すると彼らは、北に【地竜】、南に【火竜】、西に【風竜】、東に【水竜】と、四方にそれぞれねぐらを定め、大地に豊かな緑と水を育んでいった。そうして地上にあふれた自然には精霊が宿り、やがて人間が生まれた。

エンドア大陸の東、北から南西へ伸びるクルクト山脈の麓に、フアトリビアという王国があった。この地方一帯は【水竜ファルシオン】の護る土地であり、豊かな水に恵まれ栄えていた。水の都と謳われた王都アドナンでは、かつて明け方の空を翔る水竜の姿を見ることができたという。

王都の南には【精霊の森】と呼ばれる広大な森が広がっており、その奥深くには、水竜がねぐらとする湖があった。森には強い霊力が満ち、踏み入った者の命を奪ってしまう。当然、奥地にある竜の湖を見た者はなかった。

たった一人の少女を除いて。

精霊の森に、水の季節はるが訪れたころ。

木漏れ日が差し込み、仄明るい翠煙の漂う中を、急ぎ足で進む者がいた。

森に溶け込むような深緑の長い外套をはおり、籠を抱え、慣れた足取りで湖へと向かっていく。やがて木々の屋根が開け湖のほとりに出ると、その人物は被っていたフードを下げた。

現れたのは、ゆるく波打つ銀白色の髪に白磁の肌をした　白い少女だった。

湖を縁取るように群れ咲いた草花を、そよ風が撫でていく。万年雪をいたただくクルクトの山々を映した湖面は、陽光を浴びてきらめいていた。

少女は足を止め、深い青の瞳を細めて目の前に広がる景色を眩しそうに見つめた。それも一瞬、籠を抱え直すと再び先を急ぐように歩き出した。

湖の傍にひっそりと寄り添うように、古い小屋が建っていた。小屋の周りを広めに囲う柵の内側に、小さな畑があった。その横には物干し場があり、洗濯物や薬草などが一緒くたに干されて風に揺れていた。少女は湖に面した木戸の前まで辿り着くと、外套を軽くはたいてから扉を開けた。

「おかえり、アリア」

正面奥にある扉の隙間から、人の掌ほどの大きさの羽虫が、少女アリアの前まで飛んできた。それは森に生きる精霊の子供だった。ふわふわとした金茶の巻き毛に萌葱色の大きな瞳の、まだあどけない少女の姿をしている。

「ただいま、リテイル。なにか変わった様子はなかった？」

「ううん。ずっと眠ったまんま、なんにも変わらないよ」

「……そう」

アリアは、部屋の中央にある卓の上に籠を置いた。その奥の、窓のある壁には薬の調合の手順を書き記した紙がたくさん留めてあり、簡素な作りの作業台や、薬草学や調薬学などの古い本が収められた棚があった。

「南の丘の方まで行ってきたから、少し時間がかかったわね。でも、マニオールが生えていて良かったわ」

「ふうん、そうなんだ。良かったね」

小さな精霊はそう言って、少女に笑顔を向けた。

アリアは、籠の中から森で摘んできた薬草や木の根を取り出した。それらをすり潰して丁寧に漉したあと、少量の酒を加えて半分の量に煮詰め、最後に花の蜜を入れて混ぜ合わせた。流れるような手際

の良さで、あっという間に水薬が出来上がった。

「リテイ、味見してくれる？」

「えーっ」

甘い香りの漂う蜜壺の周りを飛んでいたリテイルは、思い切り顔をしかめた。

「苦くないから大丈夫。あとで蜜もあげるから、ね」

アリアはとろりとした暗緑色の薬液を一匙すくい、息を吹きかけて冷ますと、リテイルの目の前に差し出した。リテイルは渋々、指につけて口に入れ……目を見開いた。そして再び指にとって舐めた。「どう？」

「うん。全然苦くないし、甘くておいしい！」

「そう、良かった」

アリアは安堵したように微笑んだ。

森には、様々な種類の薬草が自生している。その中には、外の世界では珍しく探すのが困難とされるものも多くあった。そのため、本に書かれていない薬草の組み合わせを試したり、効能が似た薬を何通りも作ったりすることができた。今回の薬は、子供でもリテイルは子供扱いをされると怒るので言わないが、すんなり飲めるように考え出したものだった。

アリアは、出来上がった薬を深皿によそと、隣にある寝室に向かった。狭い室内に入るとすぐ、壁際にある寝台が目に入る。そこに、黒髪に褐色の肌の、痩せた少年が横たわっていた。

森を西に抜けて川を渡ったところに、エスルという小さな町がある。アリアは、調合した薬を持って、月に何度かその町を訪れていた。そして昨日も、朝から出かけて行って薬を届けた。少年との出会いは、その帰り道のことだった。

森に入り、いつもそうしているように、薬草を探しながら湖の小屋へ向かっていた。そうして湖の程近くまで帰ってきた時、森に住んでいて初めての、あるはずのない、光景に出くわした。

そこに、人の子供、その少年が、倒れていたのだ。

生きているはずがない。

アリアは息を呑んで胸を押さえた。大の大人でも、足を踏み入れれば数十分で命を吸い取られる森だ。それを、十歳ほどの小さく華奢な少年が、こんな奥地までやって来られただけでも奇跡的なことだった。

しかしその時、少年が身じろぎして小さく呻いた。アリアは我に返ると少年のもとへ駆けつけ、そっと抱き起こした。少年の体は燃えるように熱かった。そして苦しげに顔を歪め、浅い呼吸を繰り返していた。衰弱しきって、今にも消え入りそうな命。

絶対に、死なせない……！

アリアは無我夢中で少年を背負い、小屋に連れて帰った。湯を沸かし、汚れてぼろぼろの服を脱がせて汗みずくの体を拭いてやった。湯冷ましを飲ませたあと、解熱の薬を飲ませようとしたが、苦味が強いせいか微かに眉間を皺め、口の端からこぼしてしまふ。それで、甘い薬を作ることを考えた。

少年の体を少し起こして、薬をすくった匙を口に入れてやると、小さく喉が動いた。アリアは静かに安堵の息をついた。

「これで落ち着いてきてくれるといいんだけど……」

「大丈夫だよ。アリアの薬は良く効くんだから」

アリアの肩の上で、リテイルが胸を張った。

リテイルリーシュ。起きなさい。

その日、リテイルは誰かに呼ばれて目を覚ました。

ここ数日、寝ずの看病をしているアリアに付き合っ、寝不足が

続いていた。自分が起きていても少しの助けにもならないと分かっていたが、そうせずにはいられなかったのだ。

リテイルは、何千年も生きるという霊木であるモギリの種から生まれて四十年足らずの若木だ。モギリの精霊で、森の長であるクナジラムから種を授けられ、湖の傍に植えたのがアリアだった。

アリアは、どうして人なのに、年をとらないの？ どうして森で生きているの？

共に十年過ごした頃、そう、一度だけ聞いたことがあった。アリアはその頃、森に来て二十年ほど経っていると仲間に聞いたが、若く美しい姿のままだった。リテイルは生まれてからしばらくは、そんな彼女のことを精霊だと思っていた。

私も不思議なの。どうしてかしらね？

アリアは、そう明るく答えて微笑んだ。けれどなぜかリテイルには、とても哀しく、泣いているような笑顔に見えた。そして、二度と聞いてはいけなと思った。

いつか、森の精霊たちが話しているのを耳にしたことがあった。

水竜様が湖から消えてしまったのは、あの人間アリアのせいだ。

ふん。決して死ねない呪いだなんて、結構なことじゃないか。若い姿のまま、永遠に生きていられるんだろう。

ああ、忌々しい。森はどうなる？

その時リテイルは、彼らの言いように腹を立てつつも、ずっとアリアと一緒にいられるのだと分かって喜んだ。水竜など、話の中でしか知らない。それに、竜が消えても森は変わらなかった。やがてアリアの存在に苛立っていた精霊たちも、だんだんと落ち着いてきたようだった。何の問題も無い。

けれど、アリアが一度見せた哀しい笑顔が、心の中から消えずにいるのだった。なぜアリアが哀しんでいるのか分からず、思い出しでは胸が痛んで眠れずにいた時、クナジラムが話してくれた。

アリアと水竜は、魂が求め合うさだめの二人。けれど、人と竜に永遠はない。人はあまりに儂いもの。呪いを受け、アリアは愛

するものから切り離されて森に来た。一度に全てを失った。……お前は、アリアと共に生きられなくなったら、哀しいだろう？

リテイルは途端に苦しくなった。生まれた時からアリアが傍にいた。大好きなアリア。ずっと一緒にいられると思っていたのに、突然消えてしまったら……。

涙が零れそうになるのを堪えて、リテイルは頷いた。

リテイルリーシュ。起きなさい。

「う……え、クナジウム様……!？」

自分を呼ぶ声が、夢の中のものではないと気づき、リテイルは飛び起きた。

目の前に、クナジウムがふわりと浮かんでいた。長い金の髪に琥珀色の瞳をした、アリアの頭一つ分背の高い、美しい森長だ。モギリの枝の上のリテイルと視線を合わせ、微笑んでいる。

ノレムトの新芽を、卓の上に置いておいた。人の子供はもうすぐ目覚めるだろう。アリアは疲れてうたた寝しているようだから、起きたら食すよう伝えなさい。

「え、あつ、はい。ありがとうございます!」

ノレムトという木の新芽は、滋養があり、やわらかく味が良い。春先のアリアの好物と知っていて届けてくれたのだと嬉しくなって、リテイルは笑顔で頷いた。

(ん？ 今、子供が目覚めるって……)

それと、お前にこれを。そろそろ慣らしていきなさい。ではな。

クナジウムは、リテイルの小さな手に、指輪を置いた。彼女に合わせたような、小さな小さな指輪だ。そして空気に溶けるように、一瞬で消えてしまった。

3・魔性の子

リテイルが寝室へ入ると、寝台の横の椅子で、アリアが俯いていた。そつと近付くと、静かな寝息をたてている。少年を小屋へ連れてきた日から三日、眠ることなく看病を続けているのだ。クナジアムの言っていたとおり、疲れて眠ってしまったのだろう。膝の上には、広げたままの本があった。

少年は、今日の明け方には熱が下がり、呼吸も穏やかになっていた。

リテイルは少年の顔の上に飛んでいき、しげしげと見つめた。血の気を失っていた頬や唇に赤みが差している。力の抜けた、安らかな寝顔だ。

不意に、不揃いに伸びた前髪から覗く長いまつ毛が震えた。

「アリア！ 起きて！」

リテイルは慌ててアリアの髪を引っ張った。するとアリアは目をぱちちりと開け、顔を上げた。視界に、今まさに覚醒しようとしている少年の顔がとび込んできて、息を呑む。

少年の目が、ゆっくりと開いた。透き通った薄紫の瞳だ。ぼんやりと天井を見て、瞬きを二回。

「……ここ、は……？」

かすれた、小さな声がもれた。誰に問うでもない、無意識に発せられた言葉のようだった。

「水竜の湖よ」

アリアが柔らかい声音で答えると、少年は緩慢な動きで二人の方に顔を向けた。

「……！？」

「私はアリア。こっちはリテイル。あなたの名前は？」

「……僕は、カル。……ここが……本当に？」

カルと名乗った少年は、見開いた目にリテイルを映し、声を震わ

せた。

「……………それじゃ、水竜が……………？」

カルはそう言っただけで、起き上がるうとした。けれど体中に力が入らず、少し持ち上がった頭を枕に沈めた。

「無理をしないで。大丈夫、何か食べてもう少し寝ていれば、すぐに良くなるから」

「……………」

「そうだ、スープを作っていたの。今、温めて持ってくるわね。リテイ、カルの側についてあげてね」

「えっ」

リテイは突然手に余る役目を負わされたような気分になって、声を上げた。しかしアリアは振り返りもせず、さっさと寝室を出て行ってしまった。

どうすりゃいいの。人の子供となんて、話したことないし。

困惑して押し黙っていると、そんな彼女をまじまじと見ていたカルが、口を開いた。

「……………精霊？」

「！　そ、そう、人はそう言うわね」

「あの人は？」

「アリア？　アリアは……………人よ」

「……………人、なのに？」

カルは、うまく言葉にならない疑問を、視線でリテイに投げかけた。

「？　ああ、そうね。アリアは人だけど、もうずっとここに住んでるわよ。どうしてかは、あたしもよく知らないけど」

それは嘘ではなかった。過去に何があったのか、噂で聞いたことはある。けれど本当のことは、アリアにしか分からない。

リテイが再び黙り込むと、カルも口を閉じた。

翌日の朝。

アリアが薬草摘みから戻ると、カルが寝台に起き上がっていた。壁に背を預け、椅子の上に置いていた薬草事典を開いている。

「おはよう、カル。もう一人で起き上がれるようになったのね。すごいわ」

「……おはようございます」

カルは本から顔を上げて、挨拶を返した。昨日より顔色も良い。意識も、口調もはっきりしている。

「お腹がすいたでしょう。もうすぐ朝ごはんにするわね」

煽り窓を押し開けると、森の澄んだ空気が部屋に入ってきた。窓からは、すぐ側にある湖が見える。

「水竜の、湖」

「カル？」

振り返ると、カルは胸を押さえ、強張った表情をしていた。強い意志を持った紫水晶の瞳が、瞬きもせず、まっすぐ湖を見据えている。

「あそこに、水竜がいるんですね」

「！」

「アリア。僕は、水竜に会うために来たんです。竜は、人を魔性に変えることができるって聞いて、僕は」

アリアは両手で口を押さえた。

魔性。それは、人の容をした、人ではないもの。人の命を奪って、永遠とも言える時を生きるもの。それはまるで

「僕は、水竜に会わなければいけないんです」

「会えないよ」

その時、煽り窓の隙間から、リテイルが現れた。そして、白を通り越して蒼白になっているアリアの顔を覗き込んだ。

「アリア、大丈夫？」

「会えない？ どうして？」

カルが、リテイルを睨んだ。

「アリアは良くて、どうして僕は会えないの？」

「もうやめて！ いい？ 何を勘違いしてるか知らないけど、もうここに水竜様はいないの。だから、あんただけじゃなくて、誰も会えないの！」

リテイルは、顔を真っ赤にして捲し立てた。その剣幕に、カルの瞳が一瞬怯んだ。

「そんな。嘘だ……」

「嘘じゃない！ だいたいあんた、アリアに」

「リテイ」

アリアが静かにリテイルを咎めた。納得いかないという顔で振り向いたリテイルに、黙って頭を振る。リテイルは開きかけていた口を渋々閉じて、頬をふくらませた。

「……ここにいないなら、どこに……」

俯き、茫然とした様子で呟くカルを、アリアは悲しく見つめた。そして椅子に腰掛けると、少年の小さな手に自分の手をそっと重ねた。

カルは、びくりと体を震わせて、アリアの顔を見た。

「カル。リテイの言ったとおり、水竜は、ここにはいないの。それに、どこに行ってしまったのかもわからない。この森の、誰も知らないの」

カルの瞳が、揺れた。

「……力になれなくて、ごめんなさいね。あなたの事情は分からないけれど、たった一人でこの森に入るなんて、よっぽどのことだと思うわ。何か、他のことで力になればいいんだけど」

吸い込まれてしまいそうな、水底の青の瞳に見つめられて カルは、目覚めてから初めて表情を崩した。眉根を寄せて歪められた顔は、怒っているようにも泣き出しそうにも見えた。

「どうして僕を助けたんですか。どうして放っておかなかったんですか。僕なんて、あなたにとっては何の利用価値もないのに」

「カル、なぜそんな」

「僕の胸を見たでしょう？」

カルは、上着の前合わせを両手で掴み、勢いよく広げた。露になった胸の中心に、黒ずんだ痣のような模様があった。

「奴隷の焼印です。3歳の時、父に付けられました」

「……！！」

リテイルが息を呑み、アリアは目を閉じた。

「僕が産まれる少し前に、高名な占術師が現れて、予言を残したそうです。これから産まれるのは、魔性の証である黒い肌に紫の瞳を持つ赤子だと。そして 予言どおりになりました」

「そんな……」

「僕は3歳の時から10年間、地下の物置部屋で、父が捨てた古い本に囲まれて育ちました。本当は産まれてすぐに殺されるはずだったのを、母が必死で庇ってくれたそうです。その母が 倒れました。死病だそうです。僕は、僕のことですらいつも泣いてばかりだった母に……最期に……」

カルは、そこまで言うつと、言葉を詰まらせた。アリアは、再びカルの手に手を重ね、強く握った。

大人びた口調や乏しい表情、13歳にしては小さすぎる体躯。

それは、まるで呪いのような予言がもたらしたものだだった。

「読み漁った本の中に、古い伝承が書かれたものがありました。その本に、『竜は、人を魔性に変えることができる』という一文を見つけて……」

「その逆のことができるかもしれないと思ったのね？」

「はい。でも もう、おしまいです。母に残された時間は、もう

……。僕は結局、何もできなかった」

「カル……」

「僕がこのまま生きていたらきつと、母を 死んだ後まで苦しませるでしょう。こんな結果になるのならいっそ、森の中で死んでしまえば良かったのに」

そう、カルが言い終えた途端、乾いた破裂音が響いた。

痛い。

何が起こったのか理解できないまま、カルはきよとんとして片頬を押さえた。なぜカリテイルも同じ表情で、アリアを見ている。

「自分が死ねば良かったなんて言葉、お母様が聞いたらどう思うか考えてみて。私だったら、死ぬほど悲しいわ……！」

アリアはそう言うと、カルの肩に手を置いて引き寄せた。

「母親はね、自分が死んでも、子供は助けたい、生きていて欲しいと思うの。それに、あなたにはまだ、できることがあるわ。リテイ」

「……な、なに？」

「クナジウム様をお願いしたいことがあるの」

アリアがそのまま言葉を続けようとした、その時。

私はここにいる。

そう声がして、部屋の中に、外から風が吹き込んできた。そうしてほんの一瞬後、アリアの隣に金の精霊が立っていた。

「クナジウム様……！」

お前がこの森に来て50年。ようやく私を呼んだな。

胸に手を当てて礼をするアリアの頭の上から、笑みを含んだ声が降ってきた。頭を上げると、そこに穏やかな微笑みを浮かべるクナジウムの顔があった。

深い夜の底で眠るお前の心が、目覚めようとしているのを感じた。これも、魂のさだめか……。

クナジウムはそう言いながら、カルに視線を移した。何もかもを見透かしているような琥珀の瞳に見つめられ、カルは息苦しさを感じた。

「クナジウム様、この子　カルは、あなたの目に、どう映りますか？」

お前の願いは、いつも人の為にあるのだな。

クナジウムは目を細めた。

お前と同じ色が見える。近く、遠い魂が引き合い、目覚めようとしていた。人の子よ。その身には、重かるう。

カルは目を見開き、唇を震わせた。

「魔性では、ないのですか？」

生き方は、選べよう。人の心が傾けば、魔にもなる。

金の精霊はそう答え、もう一度アリアを見て微笑んだ。

その夜。

アリアが薬作りを終えて寝室に入ると、カルが目を開けた。枕元で、リテイルが体を丸めて眠っている。

「ごめんなさい、起こしちゃった？」

「いえ……眠れなくて」

そう言っただけで起き上がったカルの肩に上掛けを掛け、アリアは椅子に腰掛けた。

「明日話そうと思っていただけ、そういうことなら、今話そうかな」

「あの」

「なに？」

「アリアは僕に、あなたにはまだできることがあるって、言いましたよね？」

カルのまとう雰囲気は少しだけ変わったように感じて、アリアは微笑んだ。

「ええ。そのことを話そうと思っていたの」

アリアはカルの手をとって、両手で包んだ。

「カル。あなたのお家へ帰りましょう。私も一緒に行くわ」

「えっ」

「お母様の傍で過ごすのよ。たくさん話をして、抱きしめてあげるの。それが、あなたにできること」

カルは、当惑したような表情で、何度も瞬きをした。

「ずっと一人で、辛かったわね。でももう、肌や目の色で苦しむことは無いのよ。きつとお母様も心配して……あなたを待っているわ」
アリアは立ち上がって、カルを抱きしめた。カルの顔がぐしゃりと歪み、涙が溢れて落ちた。

「帰りましょう」

声も出さずに泣き続ける少年の小さな背中を撫でながら、アリアは目を閉じた。

その時、リテイルがそつと目を開け、顔の前で握っていた手を開いた。

そこに、クナジウムから貰った指輪があった。 銀色の、モギ

リの葉の模様が刻まれた、小さな小さな指輪。

リテイルはそれをしばらく見つめ、再び固く握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5718b/>

白恋歌

2010年10月28日06時31分発行